第２ステージ　男声合唱組曲『月光とピエロ』

作詩：堀口大学（1892-1981）　　作曲：清水　脩（1911-1986）

Program-Note

戦争直後、日本合唱連盟の立ち上げに参画した清水脩は、抑圧から一気に解放されたかのように、第１回全日本合唱コンクールの課題曲として男声合唱曲「秋のピエロ」を作曲した。その頃、「東京男声合唱団」を指揮していた清水脩は、堀口大学の処女詩集「月光とピエロ」から更に４編を選び、毎週１曲ずつ作曲して練習会場に持ち込み、インクの乾かない１枚の楽譜を囲んで歌ったという。男声合唱組曲「月光とピエロ」はこうして誕生した。

のちに、清水脩はこの曲について、「深い悩み、遂げられぬ恋、そして耐えがたい絶望感。ピエロはそれでも、異様な衣装に身を包み、真白く顔をぬりつぶし、こっけいな身振りと笑顔をつくり、舞台に立たねばならない。人間はいつの時代もこのような悲しい一面を持っている。この曲が、今日に到るまで、強い共感をもって迎えられ、歌われているのは、その故であろう」と語っている。

この組曲は静寂の中に哀愁漂う第１曲　「月夜」
満たされぬ情熱を訴える第２曲　「秋のピエロ」
おのれの姿を冷笑する第３曲　「ピエロ」
深く感傷に沈む第４曲　「ピエロの嘆き」
そして最後を飾る軽快なアラベスクの終曲「月光とピエロとピエレットの唐草模様」

によって構成され、全体を通したリズムの緩急と音の強弱の絶妙な配合が詩の言葉と見事に溶けあい、聴く側にも歌う側にも、素朴な、人の心の根幹に触れる強い感動を惹き起こす。

今回は石巻メンネルコールのメンバーに加えて、昨年３月にいわき市で小林研一郎氏指揮のもとで、この曲を歌った「多摩にピエロを歌う会」の有志の皆さんを加えて演奏する。

（　粟津易夫　記　）

石巻メンネルコールより

〝祝、感謝〟

「お山の大将」の皆様、この度は第７回定期演奏会おめでとうございます。

東日本大震災のあったその年（2011年）の12月、市民会館や文化センターも被災、学校の講堂や体育館も避難所として使用されている中、松田有子先生の熱い思いもあり、やっとホテルのホールを確保、「いろえんぴつ」「お山の大将」「やまなみ」の皆様との復興支援のコンサートが実現いたしました。私どもも練習もままならない中、御一緒にステージに立てたことは大きな喜びであり、会場を埋めた市民の方々もその歌声にしばしの安らぎと復興への元気をいただきました。本当に有難うございました。本日は、定期演奏会のお祝いと、多くの方々のご支援に対する感謝・御礼を申し上げたく参加させていただきました。住民の方はいまだに、ほとんどの人が仮設住宅に入ったままで、街の復興はまだ、その途に就いたばかりです。

遠くから、多くの方々のご支援を強く感じ、頑張ってまいります。

今後ともよろしくお願いいたします。

団長　西條　允敏

第３ステージ　ふるさとを

旅立ち　別れ　思い出　慕情　家庭　……

ふるさとは、ひとのルーツ　　過ぎ行く 人生の舞台

Program-Note

『ふるさと』　作詩：室生 犀星　作曲：磯部 俶

室生犀星は 21 才で金沢から上京し、北原白秋、萩原朔太郎らと交流し、詩作に取り組んだ。「ふるさと」は 1918 年、29 才で出した「抒情小曲集」の一編。

故郷を捨て、志を立て東京に暮らす想いを、己への励ましをもこめて、詠っている。

名曲「遥かな友に」を作った磯部俶が、曲を付けた（1951 年）。

『草原の別れ』　作詩：阪田 寛夫　　作曲：大中　恩

‘さらばふるさと　さらば友よ　健やかにあれ！　輝いてあれ！’

学窓の旅立ちの別れか、はたまた互いに新しい道に進まんとする友との別れか。

中学、高校の校内合唱コンクールで、よく選曲されている曲である。

『風』　作詩：白髭 克三　作曲：林 雄一郎

北国の冬空の夕方に、わが児はどこまで行っているのやら、迷っているのやら、母親が門口で嘆き立ち尽くしている。

林 雄一郎は関西学院グリークラブを最高水準の合唱団に育てた音楽教育者である。

『遠い母に』　作詩：大木 惇夫　　作曲：多田 武彦

大木惇夫は広島県出身。県立広島商業卒業後、20 才の年に上京し、博文館で働きながら文学活動を行った。26 才で文筆活動に専念することになる。「遠い母に」は 28 才夏の作である。前年、小田原から東京本郷根津のアパートに越していて、新居の消息に代え、故郷の母に寄せた詩である。多田武彦が平成 12 年に作曲した。

『埴生の宿』　訳詩：里見義　　作曲：H.R. ビショップ　　編曲：増田 順平

ビショップにより、1823 年に作曲されたオペラ の中で歌われた「Home Sweet Home」が里見 義により翻訳され、1889 年発行の『中等唱歌集』に載り、以降同じ歌詞で歌いつがれてきた。里見は原歌曲の意を充分に生かしつつ、日本の暮らしを包む春秋の自然の美しさを取り入れた歌詞にした。映画『ビルマの竪琴』の中に、数百人規模のイギリス兵と、日本の一小隊との、英語、日本語によるこの歌の大合唱がある。